



そしてわたくしは
それらのしづかな夢幻が
つぎのせかいへつゞくため
明るいいゝ匂の
するものだったことを
どんなにねがふかわからない

宮沢賢治（一八九六〜一九三三）「青森挽歌」より

雪の多かった2月から3月、暖かな季節が来たと思いきや寒の戻った彼岸入り。

昨年から積んどく状態の本「大切な人は今もそこにいる」（著者は陸前高田真宗寺院出身のライター）をふと開いて知った、宮沢賢治の長編詩群。若くして妹トシを失い、翌年のサハリンへ旅行（亡くした者への一種の探索行動）で書かれた中のひとつである。

252行の中盤、かなりの分量でトシの臨終に際しての詳細な観察、意識や身体についての考察が記されている。法華経に傾注してい

た賢治は、トシが題目を唱えられない状態で息を引き取った際、立ち合えなかったらしい。

上記はそのパートの後半。「夢幻」とは息絶えた直後「ねつやいたみをはなれたほのかなねむりのなかでここでみるやうなゆめ」を受けている。死に臨んでいく姿を見て、去りつつあるこの現実世界からほんとうに覚醒し、次の転生も再び人間界へと願わずにいられないような、あるいは最愛の者の命終に十分関われなかった後ろめたさのような、弔う側のさまざまな思いが見え隠れするようだ。

如来の本願は
風のように身に添い
地下水の如くに
流れ続ける

◆これは石川県白山市の真宗大谷派明証寺住職で、九州大谷短大教授・平野師の講義録「生きるということ」の中の一節です。

本願とは、阿弥陀仏が信心と念仏によつて私たちを必ず救うと誓われた根本の願いのこと。

その願いは「南無阿弥陀仏」という念仏の声となつて私の口から出てきます。そして、風や地下水の如く肉眼では見えないけれど、常に私を包み私を潤さんと流れると示されました。

親鸞聖人と弟子・唯円の問答を記した「嘆異抄」の中で聖人は「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」と述べられます。阿弥陀仏が途方もなく長い時間をかけ、あらゆる衆生を救うと建てた願いを思案するほどに、我が身ただ一人を救うための願いだと気付かされたのです。

師匠である親鸞聖人が厳しく自分の罪業深きことを見つめ、そのようなままで救われるという味わいを聞かされていた弟子もまた、仏恩の広大な働きに出会ったのではと思えます。

能力も資質も立場も性分も異なる、また見舞われる境遇もさまざまな人間に対しては、ご本願もその人に即して働こうとするでしょう。その、目に見えぬ恩恵を一身に受けていることを「ひとえに一人がため」と説かれたのです。(参照「月々の言葉」)

亡くなった人はお墓にいますか？

教えて、お坊さん

⑩

お墓に関していろいろ聞くと面白いもので、あの人とは絶対に一緒に墓に入りたくない、それなら早く身内の縁を切れればいいのにとする人もいれば、合葬でいいから親や家族と一緒に入れてほしいと切望する人、またはどうとでも(後の)手間のかからんようにしてと、ドライというか遠慮深い方もいる。

身内の人たちがお墓に集まり、さまざま供養作法を調べ皆と一緒に手を合わすと、何かそこが非日常的で聖なる場に変容する、というような宗教的情操の一方、そこに(故人が)「いる、いない」(魂やあの世が)「ある、ない」という問いも投げかけられてしまう。風になるのか草葉の陰なのか、ここは各人が自ら問うていくのがよい。こうあってほしい(けど確かめようがない)という勝手な願望や不安のもとを辿れば、結局故人との生前の関係や、自分自身がどうありたいのかに帰着しそうだ。

様々な信仰の中で、阿弥陀仏の極楽浄土に往生し、人知の及ばぬ慈悲と智慧の悟り=仏と成り、縁ある私たちを仏道へと導くと説くのが真宗だ。亡くなった人との無言の対話を通じて、「お前も必ず時間が尽きる」と示され、「安心して死んでいいのか?」と問われ、「大丈夫だ、間違いはないよ」と大きな見守りを感じるとき、私たちは故人が仏となり、お浄土から自分へ向けられた願いに触れているのだろう。

お墓も仏壇も位牌もアイテムのひとつ。悟りの世界はその向こうに広がっている。

去る1月24日夜、前住職・林孝雄は91歳の寿命を全うし、往生の素懐を遂げました。ご門徒の皆様にはそれぞれ長年のお付き合いをいただき、心から感謝申し上げます。お悔やみ・ご弔問いただいた方々にもお礼を申し上げます。以下、経緯をかねてご報告致します。

◆夜9時過ぎ、ベッドの父を見に行くと、浅い呼吸を繰り返していた胸が動いていない。息もない。一気に顔が紅潮する。

救急車が到着するまで電話指示切らずに心臓マッサージ。病院に運ばれ蘇生措置が続くも、10時に死亡診断。もう少し前に様子を見に行けばあるいは助かっていたかもしれない。

3年前の人工股関節手術後、リハビリも芳しくなく徐々に生活不活発化していき、一年前からは膝が拘縮して在宅マッサージを受けていたが筋力は減退。一ヶ月ほど前から急激に寝たきり状態に近くなり、体起こしての食事のままならず年初からは床ずれもできていた。前日から身じろぎもせず、当日午前中は在宅リハビリで少し手足も動かした父の心肺機能は、91歳と11ヶ月まで働き続け、限界を迎えたのだった。。

デイサービスに通うなどは固く拒んでいたが、1ヶ月ほど前から反応も鈍く上体を起こしてもいられなくなり、亡くなる翌々日には施設でのケアに移るための打ち合わせを関係者で行うと告げていた。それを嫌って、先に逝ってしまったのだろうか。結果、我を貫き通したのは父らしい。

◆翌朝より四日間、葬送のさまざまな段取りと執行が怒濤の如く駆け抜けた。連日睡



眠四時間ほどで準備に追われ、頭の中の作業表は十個ほども分単位での同時進行。

父が丁寧にまとめた祖母の葬儀記録に目を通してはいたが、つまり総代さん親類世話方さんなどを頼む上での見通しが甘かった、というのが主な反省。結果的にはいくつかの不手際をご勘弁いただきつつ、大きなチョンボもなく？なんとか無事に父を荼毘にふすことができた。



28日昼、葬列をなして出棺の際にはきれいな青空。16年前の祖母の時も、病院から早朝戻った時に初雪が降り始め、毎日雪かきだったが出棺の時だけ晴れた。同じような巡り合わせとは..。

不思議なもので一人では涙出ないが、綺麗に調えられた父に向かって語りかけたり、ご門徒や親戚ら何人かの方と顔を合わすたびに一気に涙溢れる。そんな涙の深いところを内視すれば、介護状態が進む父に十分な気づかひができなかったことへの懺悔と寂寥の思い。そして、ともに歩んだ有縁の方々から伝わってくる、長年に渡る無形の思いからなのだろうか。

普段の通夜は、いかにも悟ったような法話であったな〜と、喪主となって初めて理屈抜きで感じてしまう。

◆このかん、家族親戚総代の方々はじめ、いろいろな方に支えていただいた。特に、法類・妙順寺若住職は積極的に儀礼執行の段取り仕切りを執行していただき、妹は総代さんとともに返礼品采配を中心に、そして何より典礼の武藤営業部長の豊富な助言や的確な対応ぶりに大いに助けられた。彼らには感謝してもしきれない。

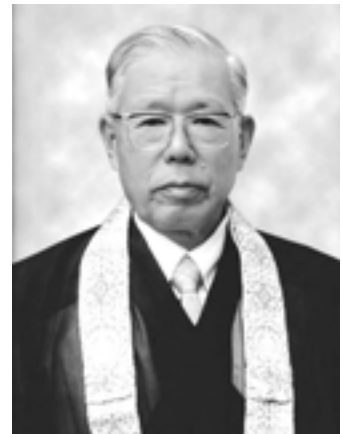
このような方々がいなかったら不可能であった、寺院特有の煩雑な葬儀の現場。覚悟はしていたものの、このお弔いの場と時間はいったい何を自分に伝え、何に気づかせようとしているのか、嵐のような日々の中でふとした時間に何度も自問してみる。

今後折に触れて気づいていくのだろう。少なくとも、新しくご縁を生み、薄くなった関係を厚くしてくれたのは、父が往生し仏となった最初の働きに違いない。

◆前住職は、父を1歳の時に、10歳では祖父を亡くして以降、母と二人で寺を支え、勉学と内外のさまざまな行事仏事に傾注し、近隣地区や丹生組の活動を引っ張る力量に長け、念仏の教えを守ることに相手を選ばず厳しい人であった。

真宗では師父という言い方はまずしないが、前住職から教えられたこと、また教えられ損なっただであろうことを考えるとき、また人間として僧侶としての姿、晩年の過ごし方にはなんとも言えぬ思いがよぎる。

ご参列、お悔やみいただいた方には心から感謝申し上げます。残された私ども少ない家族ですが、今後とも皆様からご厚情ご指導いただきますようお願い



平成19年6月住職退任式（於：本願寺）から

*前住職は、近隣のさまざまな会やお講などで法話をするにあたって、入念なメモや下調べを怠らなかつた。葉書大のファイルに多く残っていて、舌を巻いてしまうし自分や他の僧侶らにとっても大きな勉強材料になるものと思います。専門的で読みづらいのはご勘弁いただくとして、その中の一枚を下記紹介しておきます。

1. 仏 → ブッダ [目覚めたもの]

悟る → 死の故に誤った生き方をしてきたが、その本当のあり方を知り、事象の自分を回復すること。

2. 苦悩

- 幸せの人生(健康・金・子供)を求めているが
- 予期せぬ「死」が襲い、思い通りにいかずに泣く
- そして老病・死と苦む。この現実を私の「目覚めた」^{眼と心}
- 老・病・死の現実がある限り、目覚めの業(子)を産み求めても幸せになれない。

そこで悟るのか

私には現実逃避がある。① いやを「作」りたくて見えない。起るものに頼る

② 神に祈って不幸から「護」て貰おうと頼る。[本物の聖]

③ この世はあきらめ、次の世で「天」に上ると頼る。

諦観 釈尊は現実直視する。(一般の人は「神」に「依」る)

(観)(見)

① いやを現実も「作」り出す。

② 他人のせいにする

③ 何かの力に頼る

(サと「有」) } 何が原因を「作」るか、それを「依」るのか、
取捨くわい「解」決の方向性とは何か。

4. 現実直視の観望の結果 釈尊の聖見

惑・業・苦

① 苦は外に存在して私を苦しめているのではなく、自己中心の「根」(心)が「造」り出しているという了。

• 苦(金が無い、物が足りない)の原因を外にあると考えるから、外の条件が「整」った「聖」なる世界を「造」る。苦は外にあるのではなく、私の心が造り出す。

• 善は正しく思ひ、正しい行い(正しい)

(氣を「正」す) (心「正」す) (行「正」す) (徳「正」す) (身「正」す) (入「正」す) (出「正」す)

② 私の正作は、自分に都合がよいように思つては「正」しく「自己」中心の「業」。

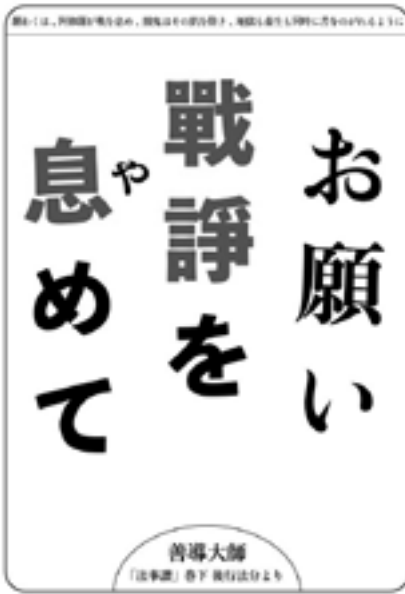
食欲 → 自分に好ましいものを欲する。「好」ましい「意」見は「正」しい了

嫉妬 → 「厭」むものを排斥する。「排」斥的「意」見は「正」しい了

• それぞれに自己勝手な世界を「造」り出し、両方が「正」しいと主張すると争いになる。

釈尊は、私たちの苦悩の現実逃避の原因が私たちの内なる「根」(心)にあることを明らかにされた。

縁起 釈尊の「無常」観・「縁起」の思想を「見」る。因縁の「道」理を「明」かす。



◆七高僧の五番目、中国の善導大師は著書「法事讃」で、阿弥陀経儀礼実践の狙いを数々上げる中「また願わくは、阿修羅が戦を息め、餓鬼はその飢を除き、地獄も畜生も同時に苦をのがれるように」と述べる。

戦は武器を持って戦い、諍は言葉で争うことを指す。いずれもホモサピエンスたる証し？としたら何と業が深い生き物なのか。東西の歴史やそれぞれの主義主張が、分断と恐れを複雑に生み出していると聞く。

大義なき侵攻のゴールは属国化？しかしそこに主権を放棄しない民がいる限り、戦闘には勝っても戦争には勝利したと言えない。国家首脳が「この選択しかない」「大〇〇帝国を築く」などと喧伝して突っ走り、その犠牲になってきたのはいつも一般民衆の生活、財産、人生ではなかったか。まさか現代社会で勃発したとは信じがたい、胸が痛む凄惨なニュース。なんとか早くやめてほしい。



◆昨年発効した「核兵器禁止条約」に貢献し、ノーベル平和賞を受賞した一人、広島市出身の被爆者のサーロー・節子さん（カナダ在住 90 歳、岸田総理は遠縁）は、受賞時の演説で「核兵器の開発は、この上なく暗い邪悪の深みに転落することを意味するのです。こうした兵器は必要悪ではありません。絶対悪なのです」と語った。

つまり今や「作ることも、使うことも、保有することも、ましてやそれで脅すことも、人として国としておかしい」と、ホモサピエンスとして共有しはじめたのだ。

核兵器や原発の脅威を傘に、大国が一方向的に国際秩序を破壊するなど絶対にあってはならない。その愚かさを恥じている彼の国の民に、罪を背負わせてはならない。

報恩寺 永代経法要 延期のお知らせ

例年 3 月お彼岸に厳修しておりますが、今年も新型コロナウイルス感染を鑑み、5 月～6 月を目処に延期の予定です。皆様には決まり次第ご案内申し上げます。

▼十一年目の 3・11 が過ぎたと思つたら強い地震が数日おきに発生。福島県南相馬市の、以前訪れたお寺さんも壁が崩れ柱にヒビとこと。被害に遭われた方々、そして原発が大禍なきよう願いたいです。

